

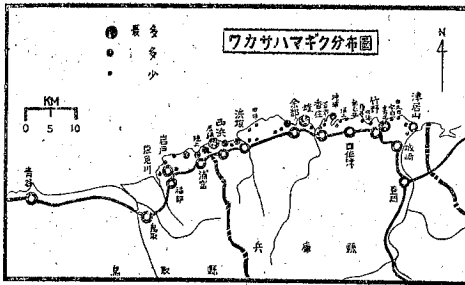
兵庫縣及び鳥取縣に於けるワカサハマギクの分布について

藤原 悠 紀 雄

Yukio HUZIWARA: On the distribution of *Chrysanthemum Makinoi* var. *wakasaense* $2n=36$ in Hyogo- and Tottori-prefecture.

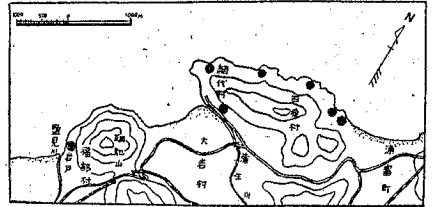
本邦に産する菊属植物には天然に於て多くの倍数種が認められ、それらの野生菊が興味ある生態的並びに地理的分布を示すことは既に下斗米直昌教授により明かにされた。即ち山地、原野に生育する種は概ね低次の染色体数 ($2n=18, 36$) を有し、海岸特に太平洋沿岸に生育する種は高次の染色体数 ($2n=36, 54, 72, 90$) を有する。

ワカサハマギク *Chrysanthemum Makinoi* var. *wakasaense* (SHIMOTOMAI) KITAMURA は下斗米教授 (1934) により敦賀湾沿岸松ヶ崎に於て発見されたもので天然の4倍体である。筆者は最近この植物の分布の全域に亘り実地調査を行つた。調査の結果この菊は兵庫縣北部海岸に特に多く生育することが分つたので主として兵庫縣及び鳥取縣に於けるワカサハマギクの分布につき報告する。



第1圖 兵庫縣及び鳥取縣に於けるワカサハマギクの分布
第1圖 兵庫縣及び鳥取縣に於けるワカサハマギクの分布

兵庫縣城崎郡城崎町の北方津居山附近にはワカサハマギクは極めて少く、城崎、津居山間にただ1株見たにすぎない。津居山より西に向い竹野に至る約10 kmの海岸のうち田久日まではこの菊は少く田久日及び宇日の海岸に少数あり、青井に至り可成り多い。之より香佳に至る間の切浜、須井、無南垣、浦上、沖ノ浦及び一日市の海岸にはやや少いが連続して生育し、更に西の鑑、余部、田井及び浜坂の海岸に亘り極めて多く、西浜村の諸寄、釜谷及び居但に於てワカサハマギクの生育は最高を示し、海に面する斜面や断崖は殆んどこの菊で蔽われて 11, 12月の花期には美観を呈する。



第2圖 自生西南限地附近に於けるワカサハマギクの分布
第2圖 自生西南限地附近に於けるワカサハマギクの分布

今回の調査によりこの菊の分布は鳥取県に及び鳥取市の近くまで生育することが分つた。即ち陸上より浦富に至る間の鳥取県の東端の地域にはやや減少の傾向はあるがこの菊は多く、田後、網代、福部と西に向つて急激に減少し鳥取市の東部塩見川の河口にある岩戸部落に至りワカサハマギクの自生は最も少くなりその分布がこの川を越していないことが分つた。塩見川の西一帯鳥取市北部の砂丘並びに湖山池北方の海岸にはこの菊は絶無である。遙か西の青谷崎の海岸はこの菊の生育に絶好の環境と考えられるが、一株も認めることができない。従つてワカサハマギクの自生西限地は東経 $135^{\circ}7'$ 北緯 $35^{\circ}34'$ の鳥取県福部村岩戸であつて塩見川が自生の限界となるものと考えられる。なお京都府及び福井県西部の海岸にはこの菊は極めて少く福井県東部に至り再び多数生育して自生の東北限は東経 $136^{\circ}3'$ 北緯 $36^{\circ}8'$ の福井県栗巢村藪であることも最近の筆者の調査により明かになつた。

以上のように天然4倍種であるワカサハマギクは兵庫縣北部の城崎、美方両郡の海岸に連続して生育し浜坂及び西浜が分布の中心となつている。この植物は他の菊属倍数種と同じく海岸線に極めて近く、潮風を真向に受けるような急斜面や断崖に多く、海岸線より100m入ると急激に少くなり、海岸より500mの地点には殆んど認められない。山地、原野に生育するリノウキクが海岸近くで染色体を倍加し更に之に他の菊のゲノムを混じてきたものがワカサハマギクであろう。然もこの4倍体の発生は比較的新しく、恐らくは兵庫縣の北部に於て起つたものと考えられ、異質4倍体となることにより日本海沿岸の環境に完全に適応し次第に西と東に拡がつて上記の分布範囲を占めるに至つたものである。この菊の生育は地質と無関係である

ことも分つたので今後もこの菊の分布は海岸線に沿つて西と北に延びる可能性をもっている。分布の限界の外である三国東尋坊や青谷岬にこの菊を移植しても正常に生育するものと思われる。

本研究は文部省科学研究交付金によつてなされたものであり、広島大学理学部下斗米直昌教授の指導により行つたものである。ここに感射の意を表す。

参考文献

下斗米直昌 1935: 本邦産菊属野生種の分布に就て, 植物及動物 3

下斗米直昌 1935: , 菊の生態と細胞遺伝

KITAMURA, S. 1940: Compositae Japonicae II,

藤原悠紀雄 1942: 薩摩半島に於ける野生菊の分布

(184頁より紙く)

縁、1.5~2.5mm, 稀に3mm, 葉鞘は扁圧された円型、無毛、葉身は3~6 m, 幅3~5mm, 線形。

(撰津妙法寺産)

マコモ *Zizania latifolia nuojaraninow* Fig. 22

高さ1.5~2mの挺水性多年草本、葉は芽を抱く、色

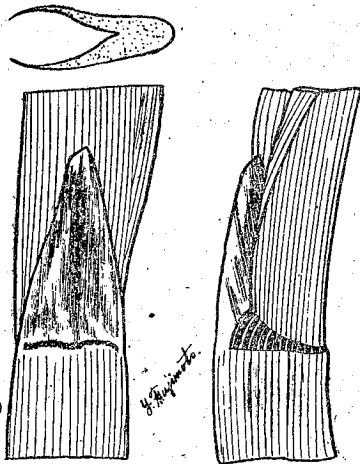


Fig. 22

百舌欄

奈良の北郊佐保川のほとりに自然研究に最適の場所としての沼沢があつた。そこへ常に二人づれの青年教師がきて何ものかの研究をつとめている。天気が続いて沼沢の水も大そう減つた或る日、例の二人のコンビは減水の水たまりに素足になつてはいりこみ、時計を見たり尺をあてたりして、横目もふらず写生を始めた。みればトンボの羽化を研究し記録しているのである。凡そ1時間たつて一応観察がすみ、二人はやをら

に就て、植物及動物 10

下斗米直昌 1947: 植物の分布と倍数性、農学綜報1.

Resume

Chrysanthemum Makinoi var. *wakasaense* (waka-sahamagiku), a natural tetraploid, is thought to be derived from *Ch. Makinoi* (ryunogiku). The distribution of this plant extends from Iwado near Tottori as far north as Mino near Fukui. All through the distribution area the plant can be found only on the slope or the cliff directly facing Japan Sea. The northern coasts of Hyogo-prefecture are all covered with this *Chrysanthemum*. In Hamasaka and in Nishihama the plant grows most abundantly.

帯は凹み紫彩を呈し背部にて狭くなる。葉基を欠く、小舌は2cm, 革質にして鋭尖形なるも先端は円味を帯ぶ。葉脈に平行せる脈あり、葉鞘は小舌に続き開く、葉身と共に脈上に纖毛を疎生し、断面はV型、中肋太く肉質部多し、葉身は幅1~1.5cm, 長さ50~80cm, 漸尖、中程より先下垂す。節は帯紫色水中の節より不定根を生ず。(撰津妙法寺産)

参考及び引用文献

前掲の文献の他に次のものを参考にした

久内清孝; 帰化植物、1950 (東京)

“ ; 採掘餘録 (其八) 植、研、XVI p. 1940 (1940) 東京

(144頁より続く)

参考文献 (貝類関係を除く) (1)大正11年、矢倉、介類叢話 p. 48 (2) 1923, 槇山、Jap. Jour. Geogr. II. No. 2 (3) 1931. 大塚、岩波講座第4紀 p. 39. 1936' 鹿間、地質雑、XL III. 1936, 上治、地球、XXV. 1933, 大放御門、地球XX. (4) 1937, 上治、地学雑、XLIX 9—584 (5) 1940? 森本、明石、中学校博物同好会 (6) 1951, 福田、安藤、地質雑、L VII—672

腰をあげて素足を水からあげたとき驚くべし水に浸つた金皮膚に一面にひるが食ひ下つて、みのを煮た如くになつている。岸に身を寄せた二人は数十四のひるを一匹づゝひふから離しとつているが、両足には鮮血りんりとして、したゝつている。実に悲愴極まるシーン。此の一人は私、(当時30歳)一人は神戸伊三郎氏であつた。(大浦茂樹)